モデルプログラム（2017 年度版）を活用した授業・研修事例

現職教員の研修　No.2

H30 年度日本語指導が必要な児童生徒支援研修会
H30 年度清水町第 2 回特別支援教育推進委員会

検証実施機関（団体）：静岡県教育委員会　清水町教育委員会
静岡県教育委員会　静東教育事務所　日本語支援コーディネーター　虎谷　千里

1　検証対象の研修・授業について　（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	□養成　☑研修
タイプ	□基礎教育　☑専門教育　☑支援員教育
研修・授業日（期間）	2018 年　9 月　25 日～　　年　　月　　日
総時間数	3 時間（　　時間×　　回）
研修・授業科目名	H30 年度日本語指導が必要な児童生徒支援研修会 H30 年度清水町第 2 回特別支援教育推進委員会
受講者	人数（　50 人） 年齢層：20 代（ 3）名　30－40 代（ 29 ）名　50 代（ 13 ）名 60 歳以上（ 2 ）名 外国人児童生徒等教育の経験： 日本語指導（成人対象を含む）の経験：

2　地域及び学校現場の外国人児童生徒等の受け入れの状況

（1）当該自治体における外国人児童生徒等の数・分布とその民族背景

清水町内小学校　61 名（日本国籍を含む）
清水町内中学校　29 名（日本国籍を含む）
母語：フィリピノ語、ビサヤ語（両言語で 56%）、
　　スペイン語、ポルトガル語（両言語で 26%）
　　ベトナム語、中国語、英語、タイ語、ボリビア語、ラオス語
1 小学校（全校児童の 10%）、1 中学校に集中

（2）当該自治体における外国人児童生徒等の受け入れ・指導体制

住民課で住民登録後、教育委員会へという流れを作り、就学するように勧めている。就学しない場合も通訳を介して保護者を説得し、就学するようにしている。その後は学校と連携し、町雇用の外国人支援員（スペイン語 1 名、フィリピノ語 1 名）を週 1 小学校に派遣、要請があれば他小中へ出向いて指導支援を行っている。
日本人支援員は日本語指導の養成講座を受講し、今後の支援に備えている。
1 小学校に加配教員 1 名、非常勤教員 1 名配置、1 中学校に週 1 回小学校加配教員が出向いて取り出し指導、その日は非常勤教員が小学校で取り出し指導
来年度以降、初期支援など町としての体制を整えていく予定

（3）外国人児童生徒等教育に関わる教員（一般教員を含む）、支援員の教育力の課題

初期支援をどの程度行えばよいか、教員間で共通認識できていない。

日々の指導で忙しく、今年度ＤＬＡを実施できていない。しっかり効果について理解し、今年度中に実施率を上げる予定
一般教員は指導支援を手探りの状態で行っている。
保護者への対応が大きな課題、教員の呼び出しにもなかなか応じてもらえず子どものことで伝えたいことがうまく伝わらず苦労している。
保護者と子どもの対応について文化の違いもあり意見が食い違う（しつけなど）そのことを伝える力や学校としての体制がまだ不足している。

3　研修・授業の成果について

（1）（受講者アンケートより）

①受講者の研修への期待　（アンケートのⅠより）

日本語が通じない子供との関わり方や保護者とのコミュニケーションの取り方
発達の問題か日本語の力の問題かの見極めと視点と支援の方法
外国人児童の学習への多様なアプローチのしかた
やる気を引き出すような支援の方法
外国人児童生徒担当でなくてもできること

②受講者の研修内容の理解度・満足度（アンケートのⅢ①より）

研修内容の理解度、満足度は「ほぼ一致」「だいたい一致」が多数

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動（受講者アンケートⅢ②の回答より）

事例紹介：個々に対応した支援の仕方、自己肯定感を持たせる、長所を生かした指導
これまでにない視点を持つことができた、個を理解する大切さ、具体的な支援の仕方、タブレットを使った学習
グループワーク：チームとして対応できるように積極的にかかわりたい、いろいろな職種の先生の困り感について、幼・小・中へと先につながる新たな視点、各市町の実態について
講義：学びの連続性について、将来のことを考えた支援、押し付けではなく子ども個々の困り感に寄り添うこと

④受講者が今後に望む研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅣより）

教科支援の仕方、各国の教育事情について、学校不適応の児童生徒への支援方法
保護者との関係づくりや対応について、具体的な指導方法、様々な幼稚園や学校での実践例、支援に使えるアプリやサイト、担当だけでなく管理職が校内組織作りに向けて制度などについて学べる研修

（2）研修企画の立場から見た、研修の成果と課題（企画者アンケートⅢの回答より）

【成果】

・活動（グループワーク）では１グループを幼稚園から高校までの教員や支援員、特別支援担当、日本語指導担当、教育委員会の様々な立場の参加者で構成することにより、縦と横の連携を取ることができた。お互いの困り感やいつどんな支援が必要かを考えるきっかけになった。連携が必要であることを実感する

良い機会になったと思う。
・特別支援担当教員、支援者は日本語指導について、日本語指導担当者は特別支援について学ぶことができたので、これからの指導に生かせることと思う。
・追跡アンケートの結果を見ると、受講者の多くが、すでに日々の指導や支援に研修内容を生かしていることがわかる。また同じような研修があったら参加したいという声も多かったので、とても実りある研修だったのだと思う。

【課題】
・日々の指導や支援に追われ、研修で学習したことを実践できないことがある。また、実際に生かす場面がすぐにないと（特別支援担当は日本語指導の機会、日本語指導担当は特別支援の子どもの指導の機会)、実践できない。
・研修で受けたことを現場に持ち帰って共有すること（本人が実践できなくても同僚の指導、支援の役に立つ可能性がある。そうすることで、研修内容が生かされる）

４．モデルプログラムについて
（１）養成・研修内容構成（報告書 pp. 72－76）について（意見）
・追加が必要な項目はないか。
今回の研修は特別支援教育が主だったので、日本語力の問題か、発達の問題かに関する項目がもう少しあると、さらに企画しやすかった。
・項目の構成（配置・カテゴリー化）は適当か
今回の研修に関しては適当だったと思う。
・項目の数や具体性は適当か。
細分化しすぎると選択時に迷うので、このくらいでよいと思う。

（２）モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）
・90 分程度のモチーフ型のプログラムは、選択・組み合わせがしやすかったか。
組み合わせのしかた、時間の配分を考える上で役に立った。
・モデルプログラムは実施カリキュラム作成時に、参考になったか。
モデルプログラムから研修の課題に内容の近いものを選択し、組み合わせることでカリキュラムのベースを作ることができた。
・講義・活動・フィールドのバリエーションは、活動を考える上で役立ったか。
3 つのバリエーションがあることで、カリキュラムを組み立てる際、より具体的に組み立てることができ、研修の進行にも役に立った。

（３）モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。
・現場の課題と研修内容を関連付け、受講者に目的を伝えやすくなったか。
現場の課題を主催者から前もって聞き取ってカリキュラムを作成し、それを講師に伝え講義の内容に盛り込んでもらうようにした。またそのカリキュラムを主催者側とも共有することによって、研修の導入部分で主催者から受講者に研修の目的について明確に伝えることができた。
・企画者と講師間で研修運営についての考えを共有しやすくなったか。
カリキュラムに研修の流れや内容を盛り込むことで、講師や主催者へ

どのような流れ（それぞれの配分時間）で、どのような点に気をつけるか
などを具体的に伝えることができた。

（４）モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

・モデルプログラムを活用することで、外国につながる子供たちの指導に際し、何が必要か、知識として知っておくべきことを教員や支援者に自覚してほしい。
・モデルプルグラムの例を見ることで、研修をする際に何が必要かは見えてくると思うので、それを研修に盛り込むよう、またレベルアップしていけるような研修の構成に役立ててほしい。
・研修のカリキュラム作成に際し、研修の趣旨をよく理解し、どのような受講者が対象なのか、受講者が研修に何を期待しているのかを事前に調査し、受講者が研修を受けて良かった、これからの教員としてのキャリアに生かせると思えるような、受講者の立場に立った研修の組み立てのためにモデルプログラムが活用できるとよいと思う。
・今回、モデルプログラム検証のために追跡アンケートを行ったが、受講者が少し時間をおいて研修内容を振り返る良い機会になった。まだ実践に生かせてない場合も、生かす努力をするためのきっかけになったと思う。